

東京大学総合研究博物館小石川分館

建築博物教室 第1回

腕足動物のアーキテクチャ —— 消極的な生存戦略を実現した巧みな機能デザイン

日時：2014年3月8日(土) 14:30-16:00

講師：椎野勇太（総合研究博物館特任助教／進化形態学、バイオメカニクス）

建築博物教室レポート

一二枚貝の殻は「服」に近いが、腕足動物の殻は「部屋」に近い— これはレクチャー冒頭での椎野先生の言葉です。椎野先生は古生物の骨格がもつ「かたち」に着目し、その「かたち」が担う役割を、適応の観点から解き明かすことを目指しています。

腕足動物は移動することはおろか、二枚貝のように殻を大きく開けることすらできません。そのため彼らは摂食・呼吸・生殖といった大事な活動を、海水の流れにつよく依存して行っています。この受動的な暮らしを支えているのが、二枚の殻の形なのです。殻を開いておけば、その内側を水流が自動的に通り抜けます。したがって殻の形が変化すれば、受動的な水交換の方式も変わってくるはずです。古生代には今よりも遥かに多様な腕足動物が生息していました。現生種とは異なる彼らの殻の形は、彼ら独自の多様な受動的戦略の存在を示唆しています。今回の講演では化石から得られた知見を軸に、そのデザインと戦略の妙が詳らかにされました。この文章では、古生物学を専攻する学生としての立場から、僕の感想を述べさせていただきます。

小石川分館に建築をテーマにした展示をつくる、という話を最初にお聞きして以来、正直なところ「ああ、僕には馴染みの薄いテーマだな」と感じていました。ところがアーキテクチャというキーワードを目にした瞬間、真っ先に椎野先生の研究が連想されました。僕には建築についての知識はありません。しかし、もし古生物学と建築学を橋渡しする切り口のようなものがあるとしたら、椎野先生の研究こそそれに相応しいのではないか、という予感めいたものが湧いてきたのです。そこで職員の方々と学生ヴォランティアの会議で、「椎野先生の研究を題材に何かできないだろうか」という漠然とした提案をしたところ、建築博物教室の第一回目の企画として採用していただきました。一ヴォランティアの提案を聞き入れてくださった先生方に深く感謝いたします。

椎野先生のご講演の後、松本文夫先生が「建築学に引きこみながら聴くことができた」とコメントされていたのが印象的でした。生物を対象とする研究者と人工物を対象とする研究者との間に共通の認識があったという事実こそ、本企画の面白さなのだと僕は考えます。また、このたび新たに設置された腕足動物の展示ユニットが、人々の視線を人工のアーキテクチャから自然のアーキテクチャへと転回させる、優れた契機になることでしょう。このユニットから、お客様に両者の美しさを横断的に見渡していただけるとしたら、大変素晴らしいことだと思います。

建築博物教室は、小石川近辺の方々を対象に据えた地域密着型の活動をめざす一方、学問体系(これも一つのアーキテクチャ)そのものに一石を投じる、とても射程の広い企画になるだろうと僕は予感します。今後も微力ながら、お手伝いをさせていただきたいと思いません。(花井 智也／小石川分館学生ヴォランティア)